

第17章 震災前から、東北は継続的に活動してきた

秋田県ほか・性と人権ネットワークESTO

真木 柁鷹さん



実施日：2019年5月30日 聞き手：前川直哉・杉浦郁子

実施場所：アイーナ・いわて県民情報交流センター（盛岡市）

【プロフィール】

1966年生まれ、秋田県出身（インタビュー時52歳）。職業は支援員。トランスジェンダー男性のFtMゲイ。1998年にES-T東北（現・性と人権ネットワークESTO）を設立し、現在も代表を務める。同団体では秋田・宮城・東京など各地で積極的に交流会を開くほか、ユースサポートや相談活動も継続して行ってきた。著書に『トランスジェンダーとして生きる』（共編著、同時代社、2006年）など。

1. ESTO 立ち上げと初期の活動

◆出身と家族構成

出身は秋田県の由利本荘市です。秋田市に転居したことはありますが、現在の住まいは地元の由利本荘市です。今は盛岡でも暮らしていますが、住民票は地元にあります。

職業は支援員をしています。

家族は両親と弟が2人です。実家に両親が住んでいて、弟たちは結婚して、それぞれ家庭を持っています。

◆ESTOの立ち上げ（1998年）

ESTOの発足は1998年です。当初はES-T東北という団体名で、そのころは秋田市に転居をしていたので、秋田市内で立ち上げました。

98年に秋田市のアトリオンで「日本文化デザイン会議」という、日本文化デザインフォーラムと開催地実行委員会が共催する一般参加型の文化イベントがあって、そこに参加して、最初のパートナーのかほりさんと出会ったのが発足のきっかけです。

当時、埼玉医大に性同一性障害の診断の相談に行っていたのですが、原科孝雄先生がちょうどその文化デザイン会議のスピーカーの1人として呼ばれていたんです。で、「秋田に知り合いがないから、このチケットあげるよ」と言われてチケットをもらい、文化デザイン会議に参加することになりました。当時は秋田から、埼玉医大と、千葉の浦安のあべメンタルクリニックに通院していました。

その会議に参加していた、秋田大学医学部の1個下の学生と知り合って、団体を立ち上げようという話になりました。その人が最初のパートナーのかほりさんで、性分化疾患で、真性半陰陽¹という診断を受けていた人で、レズビアンと自認していた人。戸籍上女性、ただ第二次性徴期に男性化が起って、見た目はMtFの人で、女性が好きということでした。服装はどちらかというと無頓着で、中性的な感じでしたね。

立ち上げたときの団体のミッションは「明日、生きていて良かったと言うために」。重いでしょ（笑）。ターゲットはセクシュアルマイノリティ。その頃ってトランスジェンダーだけのグループもいくつかあったんですけども、ESTOは元パートナーのように性分化疾患でレズビアンの人もいた。だから同性愛も含めてLGBTIみたいなくくりを対象としていました。

秋田でやろうと思ったのは、自分が秋田にいたからですね。秋田でそれまでセクシュアルマイノリティの人に会ったことがなかったっていうのもあるんですけど。

ESTOを立ち上げる前に埼玉医大の答申（同大学倫理委員会による、性同一性障害を医学的な治療対象とする答申）の報道を見ていて、それから埼玉医大を受診し、あべメンタルクリニックを受診して、秋田大学病院でホルモン療法をお願いするっていう経緯があったんですね。

で、通院のついでに東京で開催されていたTNJ（TSとTGを支える人々の会）などの交流会に行って、トランスジェンダーやGIDについて勉強しながら、まずはトランスジェンダーのネットワークを作っていたという経緯があります。そういう自助グループ活動に参加していたので、「じゃあ秋田でも」と。ぜひ秋田の当事者と会いたいということで立ち上げたんです。

かほりさんは関西の人で秋田出身じゃないので、全く地元の人と会えてなかったということがあり、地元の人に会いたいと思って始めた活動でした。だから交流中心で、交流会は当初からずっとやってきました。

TNJにつながるまでは、セクシュアルマイノリティとの接点はありませんでした。TNJの活動があるというのを新聞の小さな記事で知って、それを見て連絡をしたんです。1996年に埼玉医大の答申の大きな報道があった時、その下に「交流会がある」と紹介されていて。それを見て手紙を出して、電話をかけて、交流会に参加申し込みをしました。インターネットでは、トランスジェンダーの掲示板でつながったMtFの人たちと、メールのやり取りをしていました。

◆立ち上げ当時の告知方法

団体立ち上げ後の告知については、当時インターネットはまだ出始めでしたが、NIFTY-Serveは使っていたので、たぶんインターネットで情報を流していたと思います。東京方面のトランスジェンダーの交流会はみんなインターネットつながりで、TNJをはじめ、いくつかの団体とつながっていました。三橋順子さんが始めた団体とか、MtFの人たちとも遊

¹ 現在は卵精巢性性分化疾患（卵精巢性DSD）と呼ばれる。

んでいた。ネットは当時から使っていましたね。

ESTOは東北中心で始めたにも関わらず、九州、関東、関西から、会員登録の申し込みが来たんです。北海道もありましたね。一番遠くて石垣島だったんですけど。どうやって情報が流れたのか分からないけれども、なぜかESTOの情報を知って、入会の申し込みを頂いていました。

当時、会員登録の申し込みは郵送です。みんな手紙でやり取りをして。ネット申し込みもあったかな？ 最初から私書箱を設定して、郵便の受け取りは私書箱を使っていたんです。電話番号もメールアドレスもあったし、ネットつながりだったかもしれないし、私書箱に直接手紙を送ってくれた人もいた。そんな感じで会員数が増えていきました。

虎井まさ衛さんの『FTM 日本』にもESTOの告知を載せていたと思います。『FTM 日本』がそのころの情報ツールとして多く読まれていたので、そこに載ったものを見て連絡をくれた方もいたと思います。

◆発足当時の交流会活動

埼玉医大の原科先生から受診してくれた人を紹介してもらって、秋田の人ともつながることができました。ESTOのロゴマーク「虹を渡るカタツムリ」を書いてくれた美術短期大学の学生だった人は、今も会員ですね。

団体を立ち上げる前に、宮城と新潟と秋田の人たちで、仙台で交流会をやっていたんですよ。それはTNJの会で知り合った人とか、ネットで連絡をもらってつながった人たちです。当時のパートナーの元カノだったMtFの人も仙台にいたので、交流がありました。

集まった人たちのセクシュアリティは、トランスジェンダーが多かった。埼玉医大で1例目に手術を受けたFtMの中原圭一さんも、当時のメンバーだった。MtFもいて、女装の人もいた。

最初はGIDがきっかけで知り合った人たちと集まることが多くて、シスジェンダーのレズビアンやゲイが参加するようになったのは、もう少し後ですね。

秋田で立ち上げてみたものの、自分とロゴマークを描いてくれたトランスジェンダーの会員と、それから当時の性分化疾患でレズビアンのパートナーの3人だけが多かったの、毎月やるのに疲れてきたんですね。

秋田だけじゃ人が集まらないので、次は宮城で交流会活動を始めたんです²。仙台のほうは割といるんな人たちが来てくれて、トランスジェンダーだけでなくレズビアンの人も来たり、アライの人たちも来ていた。そこに岩手や福島や山形とか、隣県の人も来るわけです。だから宮城には人が集まっていた。

2000年から宮城で半年に1回くらいのペースでやって、東京でもやって。秋田はロゴマークを描いてくれた会員が県外就職しちゃって2人だけになってしまい、その後はパートナーとも別れたため、毎月の交流会をやらなくなっていきました。秋田でも半年に1回を継続的にはやっていたけれども、頻繁にやるという状態ではなかったです。

² 詳細な活動歴はESTOのホームページで閲覧できる。<http://estonet.info/ex-events.html>

◆全国に活動を広げる（2000年～）

2001年1月に、発足当初の「ES-T 東北」を略して「ESTO」になりました。2000年の7月には、LOUDで東京の第1回ミーティングも始めていますね。2002年には大阪でも始めています。

合宿もやっていました。秋田でもやりましたし、それから宮城、富山……。新潟県中越地震（2004年10月23日）のとき富山の合宿に参加してくれた人がいたので、みんなでカンパをしたことがあって。それが東日本大震災のときの支援活動につながっているというのがあります。

いろんな地域に足を伸ばしているのは、秋田にいても情報が入ってこないの、自分から出向いて行って情報を集めようと思ったんですね。当時『えすていーむ・れたー』という機関紙を発行していたんですが、それを所在が分かった全国の団体に送っていました。「こういうのをやっていますので交流しませんか」と。だからLOUDとかアカー、AGP、G-FRONT 関西……。宮城では、東北HIVコミュニケーションズ、やろっこやクレプスキュールとか、いろんなセクシュアリティの人と交流していました。

自分から出向いて、現地の人たちと知り合ったりとか、いろんな情報を集めたりしていましたね、積極的に。

当時集めていた情報は、主にトランスジェンダーの治療。あとは性感染症だったり、同性愛の人たちの問題だったり。性分化疾患の人たちもいろんなタイプの人に来ていましたから、とにかくいろいろなセクシュアリティやジェンダーの問題についての情報収集をしていました。秋田の人たちに何を還元できるかと考えて、自分がいろんな相談を受けたときに答えられるようになりたいと思って動いていました。

◆メール相談・電話相談

発足当時から、メール相談と電話相談をしていました。電話は携帯ですね。個人の携帯電話の他に、ESTO用の携帯電話を持ちました。

相談活動を始めようと思ったきっかけは……。何でしょうね。とにかく人とつながりたかったというのはあるんですね。あと、自分が20代のころにセクシュアリティのことを相談したくてもどこもなかったので、資源をつくらうと思ったのがきっかけです。交流会と相談は、途切れずに今もやっています。その他に、手紙での相談、面談や同行などもやりました。SNSを使った相談は会員やつながった人とはやっていますが、オープンに受けてはいないです。ここ数年は、無料のよりそいホットラインや他団体のホットラインも増えてきたので、ESTOへの相談件数は減っています。

2. 活動の広がり

◆ユースサポートの開始（2002年～）

2002年9月からは東京で親子交流会を始めました。メールや電話で中学生や高校生のFtMからの相談が入るようになってユースの居場所づくりのニーズが出てきたところに、

秋田県出身の高橋裕子先生という元養護教諭の先生、『3年B組金八先生』の鶴本直（2001年度放送の第6シリーズで上戸彩が演じた性同一性障害の生徒）の回の際の養護教諭のモデルになった先生がESTOに参加してくれたことから、ユースサポートが始まりました。

全国的にもトランスジェンダーのユースサポートは始まっていなかったため、ESTOが最初でしょうか。次に京都のトランスジェンダー生徒交流会という流れだったのではと思います。

◆全国交流会で黒字化する（2003年）

2003年の3月23日、東京都で「トランスジェンダーの自助・支援グループ 全国交流会」を主催し、98名が参加しました。それまで関東方面では、TNJがこうした交流会をずっとやってきたんですが、TNJの活動の維持が難しくなったようで、東京でも交流会をやっている関東の会員がいたESTOが引き受けることになったんですね。当時はまだgid.jpが立ち上がっていたかどうかという時期でしたから。

元パートナーが性分化疾患だったことがきっかけで、研究者の石田仁さん、谷口洋幸さんとながっていたんです。それで石田さんたちがアンケート調査をやりたいということで、この全国交流会のときにアンケート調査会「性と人権に関する調査」／「法的書類（戸籍を含む）に性別違和感を持つ人の生活の質（QOL）に関する基本的調査」を行いました。

この交流会に人が集まり、参加費でお金も集まったので、それまで赤字続きだったESTOの会計が一気に黒字になったんです。活動5年目で初めての黒字でしたね。

それまではもう全部持ち出し。大体、年10万円くらいはかかっていたね。ESTOの会計外で交通費も持ち出していました。それで、東京の会員が「ESTOの活動費から交通費出したほうがいいよ」と言ってくれたので、初めて交通費を活動費の中に入れるようになったんですけど。それまではずっと通院を兼ねていたこともあって、自費で出かけていました。団体を立ち上げた当初は、ボーナスがほとんどもらえないような会社でしたが、正社員で、1人暮らしをしながら、活動もやりながら生活していました。

全国交流会では、参加費が結構大きかったです。2,000円の参加費でしたが、精算したら黒字になった。それまでは全く持ち出しで年10万円くらいの赤字だったので、黒字化したのは大きなターニングポイントですね。それと社会調査のメンバーが、きちんとコアとして動いてくれるようになったのも大きいです。

この全国交流会のときに2人目のパートナーのFtMの人と付き合うことになったので、個人的にも印象が強いですよね。4年付き合ったのですが、都内の人だったので東京での活動も幅が広がったのかな。

◆個人史としても大きい2003年

正社員で働いて入社7年目でESTOを立ち上げて、その後はほぼ毎月イベントをしていました。大学にも入って通信大学生でもあったので、三足の草鞋状態でしたね。その会社には12年間勤務していたんですけども、2003年に会社を辞めたあとは地元に戻って派遣をやったり、日雇いをやったり、介護の仕事をやったり、工場勤務だったりいろいろやりました。

した。正社員を辞めて、時間的な融通は利くようになりましたが、お金は……。

2003年は特例法（性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律）ができた年ですし、自分としては胸の手術もした年でした。2003年は世田谷区議会議員の上川あやさんが初当選した年でもあって、ちょうどその当選を、乳腺切除をした美容外科の近くにとったホテルで知りました。だから、その辺りが自分の中ではいろいろと重なっているんです。

胸の手術は FtM のパートナーと 2 人で 2 日間かけて、1 人ずつやってもらいました。お金の都合があって、一気にやっ飛ばさおうということで入院設備がない病院だったのでツインのホテルに泊まって受けました。手術した日の夜にカップヌードルを手で持って食べたため、うっ血しちゃって病院に行って、その血を抜く作業を先生にしてもらって……。で、翌日、パートナーが胸の大きい人だったのですごい時間がかかったんですね。先生、ふらふらしながら手術室から出てきて、申し訳なかったと思っています。

3. 行政と連携する

◆行政とのつながり

秋田や宮城では講演会もやっていたし、行政からの講演依頼もありました。1999年に男女共同参画社会基本法が出来たときに、男女共同参画センターが秋田駅前のアトリオンの中に開設されて、秋田県内の女性団体との交流が始まった。秋田市の男女共生フォーラムの実行委員にもなっていたので、この頃から、性同一性障害についての講演や窓口対応についての講師を頼まれるようになりました。

また市民活動団体、NPO ボランティア団体の登録をして、市民協働事業の場で「セクシュアルマイノリティの活動をしています」という話をしていたので、そこでも県内でネットワークができたと思います。

2003年には秋田県の男女共同参画推進員になり、これは15年以上やっています。公募に応募したのですが、推進員のうちセクシュアルマイノリティだとカムアウトしているのは自分1人だけなので辞めるわけにはいかないと考えています。

推進員の仕事というのは特に決まったものはないんですよ。例えばデートDVに関する出前講座とか、男女共同参画についての出前講座とかの講師をするといったこともできるんですが、未だに1回もセクシュアルマイノリティについては秋田県庁の男女共同参画担当からオファーがなくて。しかも県の予算が削られていっているんで、出前講座とか、講演会とか、交流会活動とか、そういうのも少なくなりました。ワークショップもなくなり、年1回の認定式で県内の推進員と顔合わせるくらいですね。あとはネットワーク会議というのがあるって、中央、県北、県南でそれぞれ推進員や地域の関係者が集まっていますが、日程が合わず参加できずにいます。

それと、2009年に地元の由利本荘市の男女共同参画推進協議会委員に委任されてから、10年以上も推進員をやっています。由利本荘・にかほ地域に「11 ばれっと」という市民活動団体があって会員になっているんですが、男女共同参画を推進したいと思った女性たちが始めた団体で、その「11 ばれっと」から担当者として由利本荘市の推進協議会委員にし

てもらったんです。それまでは、個人で応募しようと ESTO で応募しようと、落とされていました。なので「11 ぱれっと」の力を借りて協議会のメンバーにしてもらったという経緯があります。

◆自殺防止に本格的に取り組む（2009年～）

2009年に厚生労働省の補助金をもらって、自殺防止パンフレットを作りました。自殺防止というテーマへの意識は、ESTOの発足当初からありましたね。ESTO立ち上げのときのテーマが、「明日、生きていて良かったと言うために」です。最初のパートナーは癌化した性腺の摘出でホルモンバランスが崩れてから精神疾患がひどくなり、自傷行為がすごくて大変でした。自分自身も子どもの頃から死にたい気持ちはずっと持っていたので、毎日を生き続けることが大変だった。

最初は秋田県の「元気あきた資金」というNPO活動の助成資金をもらって、セクシュアルマイノリティの人権啓発の講演会活動をやっていました。厚生労働省から自殺防止の補助金をもらうようになったのは、予算減少で男女共同参画社会推進のイベントがなくなり男女共同参画だけでは啓発活動しにくくなっていったということもありますが、セクシュアルマイノリティの希死念慮が高く、自傷行動の多いハイリスク群になっていることを訴えられるように社会が変わってきたということもあると思います。

2009年から自殺防止の取組を本格的にするようになったのは、親子交流会に来ていたユースの会員がその年に亡くなったことがきっかけです。その後も2011年に宮城の参加者が、2012年に秋田の会員が自死しています。

2009年に秋田で「自尊感情向上プロジェクト Bridge of Heart」を開催しました。これも自殺防止の一環です。このときにLOUDの大江千束さんや、AGPの平田俊明さん（精神科医）を呼んで話をしてもらいました。

ESTOの活動を始めて、セクシュアルマイノリティは精神疾患を発症する割合が高いと思いました。それで大学に入って臨床心理の勉強を始めた。交流会に来てくれた参加者が、自分がない場で交流することでトラブルになり、交流会の参加者がいなくなるというのが秋田と宮城で繰り返されてきたこともあって、これは専門知識がないと無理だなと思う大学に入ったというのがあります。

2002年に放送大学に入学して、8年かけて卒業しました。その後、大学院の科目とかも取って、2016年に認定心理士の資格を取りました。2018年には産業カウンセラーの資格も取りました。

◆行政と関わる理由

権利向上のために行政と関わっていくというのは、TNJや、宮城の小浜さん（本冊子にインタビュー掲載）の団体が動いていたので、そういったところから学びました。

行政への働きかけは、やらないと自分が困る。社会を変えないと、いつまでたっても自分の生きやすい地域にはならないので。

でも行政と関わり始めた頃は、すごくとげとげしていたので、みんなに怖い人だと思われ

ていました（笑）。今は「だいぶ丸くなったね」って言われるんですけど。

特に行政関係には不信感があった。女性団体に対しても、どうせセクシュアリティの問題は理解されないだろう、というような不信感がずっとあるので、ハリネズミみたいな状態だったと思います。

行政と関わり始めた時期が比較的早いのは、トランスジェンダーとして書類上の性別の問題があったからです。たとえば同性婚の問題は同性愛の人たちにはとても大きいけれども、同性パートナーとの生活を保障してほしいなどと訴えなければ行政と関わらなくても済むじゃないですか。でもトランスジェンダーは公的書類上の性別の問題が本人確認や身分証明などの障害なので、どうやって行政とやり取りをして生活の不自由さを解消していくかというのが大きな課題だから、行政との関わりが必要になりました。

行政に働きかけてきたおかげで地元の由利本荘市では、公的書類上の性別のプライバシーが守られていて、病院への受診や健康診断、確定申告などが不自由なく出来ています。

地元の市議会議員に力添えを頼んだわけではなかったんですけども、行政の窓口で「性別を記載しないでくれ」って訴えていたときに、ちょうど恩師だった議員が通りかかって声を掛けてくれた。それで、なぜか性別欄の削除がすんなりと通ったということがありました。

性別が記載されていると行政の窓口に行くと「消してくれ」と言って、対応してもらっています。40歳以上は無料の健康診断が受けられるんですけども、その受診券の性別も消してもらっている状態で、カミングアウトしている病院で健康診断を受けています。これも個別の交渉ですね。

健康保険証は、秋田市で会社員をやっていた時に総務の人が理解してくれて、社会保険事務所にかけあってくれて、当時の性別欄は「男」で発行してもらっていました。そういう事例が全国に何件かあるんですよ。手書きで書いてもらっていたんですけど、行政のコンピューター化が進んで、「男」で発行できなくなったので、そのときに「じゃあ無記載にしてくれ」という交渉をして、それからずっと無記載です。1998年には名の変更の家庭裁判所への申し立てを秋田で最初にして、2年が掛かりましたが「GIDの疑い」という理由で変更することが出来ました。男性ホルモン注射は婦人科疾患を理由に秋田大学病院で開始したんですけど、1998年の受診から20年以上が経ちましたが、GIDの診断は未だになくて、診断書を発行してもらった2人の先生は決まっているんですが、忙しくて進んでいない状態です。

健康保険証の性別変更を会社にお願したときに、名の変更なども連動して同時にやっています。会社は協力的にやってくれました。自分はCADの専門職として勤務していたので、辞められると図面が描く人がいなくなるっていう事情もあったり、あとその総務の担当者がマイノリティなのかもと感じるような人だったので、もしかしたらそういうことでの理解もあったかもしれません。応援してくれる気持ちがあったのかもしれないです。だからその当時は恵まれて後押しをしてもらって、社内トランスもしたし、男性で雇用保険を掛けられている状態で退職したから、雇用保険と労働災害保険は男性で加入してきました。

4. 震災を経て（2011年～）

◆会員名簿で安否確認

2011年の3月は、ポリテクセンターで職業訓練を受けていました。その前は農場法人で県の農業研修生として仕事をしていて雇用保険に加入していたので、職業訓練を受けることが出来ました。ポリテクセンターのある潟上市から信号が消えた国道を1時間半走って、地元の由利本荘市に帰りました。

震災は金曜日で、土日が休みだったので家にいました。ESTOは携帯サイトを持っているので、できることは携帯サイトに情報を載せることかなと思い、週末はずっと被災者向けの情報サイトを作っていました。当時の副代表だった石田仁さんも手伝ってくれて情報を更新して、Twitterも使える状態でした。SNSには有益な情報も多かったけど、色んなデマも流れていたのを思い出しますね。

ESTOで震災の具体的な支援をしようというのは最初は考えてなかったんですが、交流のあった北海道の団体がお金を口座に振り込んでくれて。被災者に届けてほしいということだったので、じゃ、そういう気持ちのある人がいるんだったらということで、募金を集める呼び掛けを始めました。口座に入ってきたお金を被災している人たちに、それぞれの被害の状況に応じて手渡しや口座振り込みで送りました。

会員の安否確認もしています。メールも電話も使える状態だったので。宮城沿岸部に勤務していた秋田出身の会員は、1週間くらいが経ってようやく共通の友達つながりで生きることが確認された。その会員の場合は、mixiで連絡があったので安否確認ができたんです。

震災前に音信不通になっていた人以外は、ほぼ連絡が取れて安否確認が出来ました。

震災の当日、揺れが収まって避難しようということになって、避難中に交流のあった大阪の橋本秀雄さんから「大丈夫か」って電話がかかってきたのを思い出します。ハッシーさん（橋本さん）とは、最初のパートナーのかほりさんがPESFIS（日本半陰陽者協会）という団体をやっていた関係で知り合って、宮城で講演をしてもらったこともあります。震災後に東京で交流会を開催したときには関西からかほりさんが参加してくれましたが、その後も色んな人から連絡が来たり、こちらからも安否確認をしたりしましたね。

ESTOは発足当初から年会費1,000円で会員登録してもらって、郵送で機関紙『えすていむ・れたー』を送っていましたが会員名簿がありました。だから住所や連絡先は把握していた。住所を登録したくない人にはメールで連絡を取っていましたが、今みたいにメーリングリストで流すようになったのは、ずっと後です。

◆被災した会員へ物資を運ぶ

震災の1カ月後の4月16日に、ちょうど仙台での交流会を予定していたんです。それを、被災者交流会というかたちで開催しました。まず秋田から仙台に車で荷物を運んで、そこに参加してくれた人たちに分けて持ち帰ってもらいました。秋田から向かったのは、ESTOのロゴマークを書いてくれた会員と自分の2人です。

交流会は「エル・ソーラ仙台」の研修室を借りたんですが、アエル（仙台駅近くのビル）の28階だったので、窓から沿岸部が見えました。がれき撤去の土煙を見て、「ああ、片付けているんだな」と思いながら……。

配布物資は、トイレットペーパーとか食料品とかタオルとかだったかな。そんなにいっぱいではなかったと思うんですけども。

その日は、秋田出身の会員のうちに泊めてもらって。翌17日は、宮城の沿岸部を北上して走りました。亘理、多賀城、塩竈、石巻と4箇所を車で回って、会員や交流会に来てくれた人に物資を渡しました。会員名簿を使って、あらかじめ会員に電話で連絡をとって「訪問していいか」と確認した上で、訪ねたところもありました。夕方には、石巻から秋田に戻りました。

道路の瓦礫は寄せられていたので、車は走れました。ガソリンも途中で給油できたのかな。物資は、だいたいこんなものが足りないだろうと思うものを持っていったと思うんですけども、主に食べ物や衛生用品でした。

でも訪問してみたら、家の中にはそんなに被害はなくて。津波で自宅が全壊したのは、現在の副代表の内海さん（本冊子にインタビュー掲載）のところぐらい。他の石巻の会員のところは床上浸水をしていただけでも、とりあえず2階は無事だったので、そこで生活をしていた。物資はそれなりにあった状態でした。

一番物資不足だったのは、震災が起きた直後の1週間とか2週間くらいですね。その頃、東京の親子交流会の参加者が、仙台の親子交流会の参加者のところに宅急便で荷物を送ってくれましたが、当時は交通機関が被害を受けていたので、受け取るのに苦労したそうです。

1カ月後には、石巻もだいぶ片付きはじめていたんです。まだ更地にはなっていませんでしたが、道路は通れるようになっていました。海の際のところの区画では津波の水はまだ引いてなくて、その先の家に行くための道路は水没している状態でしたね。

夏前のまだ4月だったのでそんなに臭いもしなかった。瓦礫の片付けが始まったところでした。

◆「被災地を利用された」という感じ

震災前に東北で活動していたセクシュアルマイノリティ団体は11団体。震災後は、辞めたり立ち上がったりで、50団体以上にはなっていたと思います。一度交流会をやって、それで終わってしまった団体もあれば、活動を続けている団体もあります。

震災の後、都市部の団体から被災地にいろいろ働き掛けをされ、すごく傷ついたという話を聞いたことがありました。震災に負けたくない気持ちで団体を立ち上げたっていうのもあるのではと思いますし、地元の当事者とつながって助け合いたいという気持ちが起こってきたのも、東北で団体が増えた背景にあるのかもしれないと感じています。

当時の気持ちとしては、「被災地を利用された」と感じていました。被災地を支援することで、自分たちの活動をPRするネタにされたという感じですかね。

震災前から東北には団体はそれなりにあって、活発にやってきました。ESTOだけじゃなく、青森も動いていたし、秋田よりも宮城はずっと長いわけですし。だから、カミングアウト

トが難しい環境ではあったけれど、東北は活動を継続的にやってきました。だけど、そこに都市部の団体が東北の状況を考慮せずに入ってきた。自分たちの活動のPRのために、被災地を使われた感がありました。

東京で被災地の人を呼んでシンポジウムが何回か開かれましたが、震災から数年が経っても被災地支援の企画が来ることが他人事に思えて、「東北のことを考えるんじゃないくて、自分たちが被災したときのことを、そろそろやったらどうでしょう」って返したら話が来なくなりました。

首都直下型地震が起こる可能性も高いわけですが、いつまでたっても災害支援を自分たちのこととして取り上げようとしない。あくまでも、「かわいそうな東北の被災地支援」というところから意識が変わらないように見えた。それには腹が立ちました。

◆震災と社会の変化

震災後に活動を始める人が増えたことには、それまで団体とつながることの必要性を感じてこなかった人たちも、「自分たちで何とかしなきゃいけないんだ」という気持ちが強くなったのではと感じました。被災して初めて、当事者団体とつながっていることの心強さとか、困ったときに助け合えることに気が付いた。誰かとつながりたいと思って、団体を立ち上げたと思うんですよ。

「岩手レインボー・ネットワーク」(本冊子にインタビューを掲載)も、立ち上げは震災の後ですよ。震災で被災した後、「セクシュアルマイノリティの交流をする場が必要だ」と思ったから、皆さんそれぞれやり始めたと思うんです。それまでは活動と無縁でも、特にそれで自分たちが孤立しているという意識はなかったのが、震災をきっかけに、どこにも助けを求められないことの怖さという気づきがあったということだと思います。

震災が直接のきっかけではないかもしれないけれども、直後に立ち上がった団体は、誰かとつながりたいという気持ちが大きいと思います。大学のサークルもできました。

あと、LGBT っていう言葉が出てきてから、社会が変わりましたね。学生サークルも、活動休止したところもあるけど、新しく発足したところもあるし。秋田なんかは特に LGBT という言葉がきっかけになって、学生たちが立ち上げたと思うので。

セクシュアルマイノリティの認知度が高まったから、じゃあ自分たちもクローゼットから出ても大丈夫かなと思って、声を上げ始めた人たちも多いかもしれない。だから震災だけじゃない部分もあるということですよ。

◆ポスト・トラウマティック・グロース

被災地では、「自分たちで何とかしなきゃいけない」という思いはあると思います。熊本もそうですよね。熊本地震の後に団体活動が活発になった。ポスト・トラウマティック・グロース(心的外傷後成長)の一種ではないかと考えています。

震災がきっかけになって、「自分から社会に訴えなければ、誰も助けてくれないんだ」というような感覚が生まれたのかもしれない。今までは地域の中でクローゼットでも、自分がセクシュアルマイノリティだと言わなくても何とか生活できていたけれども、それじゃあ

安全が守れないという危機感を覚えたかもしれないと感じています。

◆搾取されてきた東北

ただ先ほど述べたとおり、都市部の団体への怒りが活動の原動力だったという人もいます。外から東北をかき回されることに対する怒りも強かったのかもしれないですね。それは熊本の団体がいくつか立ち上がったのとは、また違う理由だったかもしれない。

東北という地域が、関東からあまり対等には見られてないっていうのは、あるんじゃないかと思います。自分は被災地ではない秋田だし、直接感じたわけではないけれども、もしかしたら、震災後のやり取りの中で「いいように利用されている」感じはあったかもしれない。

震災とは関係なく、私自身は他の団体や研究者に利用されるのを避けるために、東京に出なかった部分もあります。地方だからこそ、自分の活動ができるという思いがある。東京を拠点にしちゃうと、いろいろなことに巻き込まれてしまう。距離があると、それがなくて済むというのはありましたね。

熊本では、なぜ震災後に団体が増えたかっていう研究はされてないですよ。九州のほうは、そんなに東京の影響を受けるようなエリアではないと思うんです。

仙台と東京の、距離の近さってあるじゃないですか。あと、東電もそうですけど、東北が関東に対して電力を供給する基地になっていた。東北のいろんな資源を利用して、関東方面が発展してきたっていうことはあるし。それこそ東北地方は、蝦夷と呼ばれた時代、アテルイの時代から、中央に侵略され、搾取されるという関係が続いているというのもあると思うんですけど。

5. クローゼットとアウトィングの恐怖

◆震災とクローゼット

震災の1週間後ぐらいに、共生ネット（“共生社会をつくる”セクシュアル・マイノリティ支援全国ネットワーク）が要望書（緊急災害対策本部・内閣官房長官あての「被災地におけるセクシュアル・マイノリティへの対応に関する要望書」）を出したのをネットで見えました。インターネット上のやり取りとかも見ていたと思います。

東北ではクローゼットの当事者が多い状況で、東京発信で「避難所で気を付けてほしいこと」が出ると、アウトィングの危険性があるんじゃないかという思いはありました。地方は地域が密ですから、本人が言わなくても、すぐに噂って広がるので。そこにLGBTなどの情報が入ることによって、当事者探しが始まってしまう危険性がある。「あいつ、そうじゃないか」って噂が勝手に広がっていくと、当事者が居場所を失って地元に住れなくなってしまふのではと感じました。

◆顔出しを避ける

同窓会とか、1回も行ったことないです。この間も同級生に偶然会ったんですよ。母親の誕生日のプレゼントに花を買いに行っって、初めて行った花屋でクレジットのサインをした

ら、名前の変更をしているにも関わらず、「同級生ですよね？」って言われて。「覚えています？」と聞かれたから「あー、分からないですね」って言って帰ってきました。

ホームヘルパーの資格を取りに研修に通っていたときも、同級生がいたんです。でも、男性で受講していたし、名前も変わっていますし、知らない顔をしていました。

地域で誰かに話そうものなら、あっという間に広がるので、自分では言っていないんですけども、たぶんどこかから広まっている。高校のときの部活のメンバーにはカミングアウトしたことがあったので、そのつながりで広がっているのかもしれない。

地元の男女共同参画推進協議会の企画で市政だよりに書いたコラムが、戸籍名と顔写真と一緒に載ったこともあるので、「あの人じゃないか」という話になっているかもしれない。どこからか分からないけど、アウティングは日常的に起こっているし、災害時には非常に危険だと思いました。

◆就職や家族への影響を考える

去年「レインボー・フォーラム AKITA」を主催したとき（2018年11月24日）、初めて秋田県内でNHKのニュース番組で取り上げていただいたんですが、それまでは新聞でさえも、顔は出していませんでした。

メディア露出を避けていたのは、地元での就職活動に影響するのではと考えていたこともあります。ただ、今の仕事は地元ではないし、カミングアウトして働いていますし、しかも50歳を過ぎて就職活動をしなくてもなかなか仕事が見つからない、口コミでないと仕事が見つからないという状況になったので、メディア露出を避けるのをやめようと思ったんですね。メディアに顔を出すことについて、親の同意も取れましたので。

自分はいいいとしても家族がね。親はまだしも、うちは弟たちの奥さんだったり、従兄弟も多いですから。兄弟や親戚に何かしらの迷惑が掛かるかもしれないとか、「おまえのところのあれはそうなのか」って言われて家族や親戚が困るっていうことがあると嫌だなというので、メディア露出を避けていた。でも一番大きかったのは、地元就職が基本だったので、就職できずに収入が無くなるのが怖かったっていうことだと思いますね。

2017年10月7日に開催した仙台の「多様な性を生きる人のための防災ガイドブック発行記念シンポジウム」でNHKのニュースに出たときも、宮城県内だけだから顔を出したんです。あれが秋田のテレビ局や新聞だったら、まだためらったかもしれません。

用心はしますね。2008年まで派遣社員をやっていましたが、あと半年で正社員雇用の話をしようと思っていたところにリーマンショックが起こって、派遣切りにあいました。リストラされた後は、恩師の選挙事務所にいたときに知り合った知人に就農実習生として雇用してもらい社会保険に加入していたので失業給付が受けられて、震災のときは男性でポリテクセンターに通っていました。地元での就職しか考えていなかったのも、どこから情報が漏れてどんなトラブルに巻き込まれるかもしれないっていうのは予測不能だったので、メディア露出はしないようにしていました。

6. 地域性とジェンダー

◆ESTOの地域性

ESTOは秋田・宮城・東京で交流会を開いていたので、それぞれの交流会に集まってくれた人たちに合わせる形で、地域性を出していました。何を自分たちの課題として持っているのかを聞いて、そこからこういうことをやろうというのを、それぞれの交流会でやってきていました。

例えば東京だったら、GIDの治療の問題とか、トランスジェンダーの権利の問題をやってきた。宮城は震災が起こってからは、日常と非日常の不自由さをどう解消していくかをテーマにやってきています。

秋田は教育関係。学校の先生たちにどう理解してもらって、どうすれば子どもたちが生きやすくなるか、生きやすい地域を作れるかっていうのをやってきました。今はいったんそれを終結して、今度は同性婚の問題とか、地域の権利向上のためにどうやっていけばいいのかという話し合いが始まったところです。

秋田の自殺対策事業では、アライを増やすことが目的の一つです。現状では、当事者が団体とつながろうとしても、家族との関係が悪くなるとか、地域の中で目立つようになることを恐れていたり、広い秋田県なので移動が大変で、交流会に行きにくいことがあります。なので、ESTOにアクセスできなくても、どこに居てもSOSを受け止めてくれる人を作りたくてアライを増やそうと考えて、中央・県北・県南の3箇所で開催会などのイベントを開催したりしています。

ミーティングなどの地域交流会の参加者は多くないけれど、参加費を無料にしたり、セクシュアリティに関わらず誰でも自由に来て、アライの人たちも参加してくれればと思って工夫を重ねてきました。当事者だけでつなぐと共感や受容への期待感が強すぎてぶつかってトラブルになるっていうのを繰り返してきたので、アライが入ることによってその期待感が緩和されると感じることもあります。

◆都市部のほうが情報難民になっている

ネット時代なのに、関東や関西でむしろ情報難民になっているなど感じることもあります。ネット上ではつながれるけれども、オフラインの場で、正確な情報や安全な知識を持っている人たちとつながれてないケースがあるように感じてきました。

性別適合手術のためのアテンダントとか、そういう人たちは表に出て、いろんな体験談を披露したりするけど、手術の失敗や都合の悪いことっていうのは隠されるわけで、その都合の悪い情報を持っている人たちにつなぐにくくなっているんじゃないかと思います。失敗例だったり、ここの先生はちゃんとフォローできるよっていうような情報にネットではつながりにくいんじゃないかと。

都市部でそうなっているように感じたのは、関西でESTOがGIDをテーマに交流会をやったら、参加者が「こうやって話を聞ける場がないんだ」って言ったからというのがありました。都市部ほど商業的なLGBTの情報が多くて、人権の問題や生活密着の情報が得られ

にくくなっているのではという印象がありました。

2018年までやっていた東京の交流会では、GIDの問題を取り上げてやっていたんですが、集まってくる年代がほとんど40代以降でした。40代～60代で、定年退職をした教員もいた。1998年に公式なGIDの治療が始まった前後の状況を経験している世代の人たちの集まる場がなかったので、受け皿の場としてESTOの交流会があったと思います。

埼玉医大の答申の前に治療を開始した世代の人たちも、自分で情報を集めて生活をしてきて、それなりの状況に落ち着いているわけです。だから、いろんな実体験の情報を持っているわけですけど、そこと若い世代とが繋がってない。都市部のほうがクローズで生活しやすく他の当事者につながることを避けることも多いし、獲得してきた体験を共有する場がないと感じていました。

都市部に比べて地方の交流会は、セクシュアリティや年代で分けられていないので、むしろ地方のほうが色々混ざりやすい感じがあるのかもしれないです。

ただ、トランスジェンダーでもTSの人たちは、基本的に自分の治療とか生活が何とかなれば活動に来ないですね。LGBもパートナーができれば、コミュニティに来なくなるって話もあるし。だから東北でも、セクシュアリティと生活状況次第で横のつながりが作りにくいということがあると思います。

◆自分から話さない東北

東北では、参加者にしゃべらせるのにすごく苦労していました。本当にしゃべらないんですよ。男女共同参画の会議でもそうだったし、LGBT研修に来てくれた教職員の人も自分からは話さない。

で、会議の場でどうやって話してもらおうかという、マイクを回すんです。そうするとみんなしゃべるんですよ。マイクを渡されるとしゃべるのに、手を上げて発言しろと言われると誰もしゃべらない。これって秋田特有なのか、東北全体の問題なのかって、ちょっと興味深かったです。

自分から手を上げてしゃべると「あいつ生意気だ」とか、そういう周りの目が怖いっていうのは東北では強いように感じます。

◆ジェンダー差別への怒り

男女共同参画の場は、女性がほとんどなので「女性なのに」と思われるようなことはないですが、町内会とか会社の役員会とかの場では、女性が先に発言すると叩かれてつぶされるっていうのは、まだあるんじゃないですか。

ジェンダーの問題は大きいです。自分が30代まで女性として生活をしてきて、家族の中では弟2人と自分で、女の子として育ってきたので、性別によって扱いが異なっている部分に対する反発はありました。第1子っていうことで、自分が長男だと思ってきたところもありますが、弟の方が戸籍上の長男なので遠慮するところがあります。

女性だから可能性をつぶされるっていうのは、非常な怒りですね。そこもESTOの活動の原点かもしれないです。

地域の集まりなどで、男性はお酒を飲んでいて、女性は台所でという話はよくありますね。ただ、うちはそこまでひどくはなかった。

子どもの頃に自分の家で一番多かったのは、母親と祖母と父親が三つ巴でけんかをしている場面でした。うちの母親はおとなしいタイプではないので、遠慮なく主張する。母は中学生のときに母親を亡くして、長女として頑張っただけでこなきやいけない人だったので、負けずにものを言います。たぶん、その母の影響があるので、自分もこうして活動ができているんだと思います。

本家・分家という意識は、うちはそこまではないですね。自分が住んでいるところって、植民地的な地域なんです。うちの父親が子どもの頃、戦後に樺太から引き揚げてきて、新たに開拓した土地なので、古くからのつながりがないんです。由利本荘市自体は古いですけど、自分が住んでいる町内は、戦後に開拓されたところだから、割とそういう縛りが薄いように感じています。

◆岩手のケース

岩手レインボー・ネットワークが、震災後に立ち上がったじゃないですか。山下梓さんがその当時、岩手大学の男女共同参画の部署にいたわけですね。で、岩大の学生サークルとして「Poi」が立ち上がり、その卒業生の加藤麻衣さん（本冊子にインタビュー掲載）が「いわてレインボーマーチ」を立ち上げて、2018年にレインボー・パレードを成功させた。

その流れを見ていると、受け皿ができたことでエンパワメントされて、自分たちが自立性を持って動けるようになったんだと思います。そして加藤さんのように、力のあるメンバーがいると、活性化する。そのやる気のあるメンバーがどうして育ったのかっていうのは、個人の問題も大きいと思います。中心になる人が意識を持てれば、周囲の人たちも変わってきてエンパワメントされていく。

7. 成果と課題

◆活動の成果

ESTO の活動の成果としては、実際につながった人たちがそれぞれ自分の団体を立ち上げてきたということもありますね。栃木のLGBT支援団体「S-PEC」は、ESTOの親子交流会の参加者の人たちが中心になって立ち上げた団体です。和歌山の「チーム紀伊水道」などいくつかの団体から、立ち上げのときにESTOに活動のノウハウの問い合わせがありました。

その他にも、ユースたちのエンパワメントをしたりとか、いろんなつながりのアライの人たちを増やすというのは、地方でやってきたと思っています。

都市部で他の団体に所属している人でも、自分たちの活動や生活の場で吐き出せなかったことを、ESTOに来てくれて話せる場として使ってくれていたということもありました。団体名に「性と人権」とつけたくらいなので、セクシュアルマイノリティをはじめ、性に関する人権問題を意識化してもらって、性に関するイメージを変えてきたっていう点でも、意義

があるかもしれないですね。

あとは、自殺の問題。「セクシュアリティの悩みと自殺の問題はリンクしているんだよ」というような、「性や性別の悩みで死ぬこともあるよ」というような話はずっとしてきました。

相談事業や交流会については、個人の問題を社会の問題として可視化してきたという部分もあると思います。秋田のミーティングのあと、「自分だけの悩みを話してしまい、あの場でふさわしくないような発言をしてしまってすみません」というメールをくれた参加者がいました。その場では参加者の了承を得て地元紙の取材が入っていたんですが、そのときの発言は取材記事に取り上げられて、「これはみんなに共通する悩みだよ」という訴えになりました。その参加者も、「ああ、自分だけじゃないんだな」というのと、「言ってよかったんだ」という気持ちを持ってもらえていると思います。個人の声を社会に届けるという点での意義もあると思っています。

◆今後の課題

活動の今後の課題は、東北をどう生きやすくするかということで、特に北東北を考えながらやっているところですね。ちょうど盛岡に縁があって岩手とのつながりもあり、青森はスクランブルエッグとの関係がある。だからこの三角形になっている北東北を住みやすくするために、チームワークよく、ネットワークを活用してやっていきたいと思っています。

南東北と比べると、北東北のほうがずっと閉鎖性が強いかもしれない。アウトィングを恐れる気持ちとか。口が重いのは、北東北は雪が多い地方なので。あと北東北は、経済力が落ちているので県外流出が激しい。その中でどうやって帰って来られる地域を作るかっていうところでしょうか。

あと、東北特有の課題は面積の広さです。公共機関のアクセスがかなり悪いですから。仕事や生活のために車を持たなきゃいけない。

GIDの人たちは、特に手術しようと思ったら安定した仕事が必要になってくるので、地元で働けないと思ったら都市部に出て行ってしまったり、地元で居てどうやって生活費＋交通費＋手術代を確保するかっていう課題もありますね。

ゲイ、レズビアンの人たち、特にゲイのほうは、本家分家じゃないけれども、「家を継ぐ」という地縁・血縁の重さも東北地方の課題かな。まあ東北に限らず、地方はそうでしょうけど。北陸とかもね。

ゲイやレズビアンは、何らかの理由でマイノリティの人権に対する意識が高いというケースでない場合は、クローゼットになりやすいのかなと思います。カミングアウトをしなければ、マジョリティの中でも過ごせるし。性別違和のある人たちの場合は、結婚していて、子どもがいたりすると、身動きが取れないケースが多いのではと思います。

自分の身近に何らかのマイノリティがいたなど、子どもの頃の環境の違いも、活動を始めるきっかけにはあるかもしれないですね。

◆法人化について

東北にはセクシュアルマイノリティのNPO法人がないんです。理由は、めんどくさい。メリットがない。雑務に時間が取られるからかな。

法人化しなくても行政とつながれるし、特に困らない。むしろ法人化して登記登録をする、個人情報を書きたくないから、そこにはアウトティングの不安があるのかもしれない。

ESTOに限った話ではないですが、お金とエネルギーを使って法人化しなくても、もう実績があって行政ともつながっているから。法人格を取ると、毎年の税金の支払いとか、期限に遅れないよう事務手続きはしなきゃいけないし、いろんな煩雑なものが被さってくる。だったら、法人格は要らないと。なくても何とかできます。大きい助成金をもらおうと考えなければ、全然困らない。法人格はむしろ足かせ。ESTOでは大きな助成金を取る予定はありません。もしやるんだったらESTOじゃなく別の団体を作りたいと思います。

それに自分の戸籍の性別変更の問題が絡んでいるんです。法人化の話は、実は以前一度あって、設立総会もやったんですけど、代表の個人情報の公開は出来ないとあって「保留させてほしい」と言って、諦めた。みんなに諦めてもらっているという経緯があります。

◆「戻って来られるふるさとにしよう」

東京に出ていく人もいますが、私は人が多い所が嫌いなので。2018年12月1日で、東京の交流会もクローズしたんです。というのは、東京に行くとすごく人が多くて、疲れる。仙台でさえ行きたくない。なので、秋田がちょうどいい。

盛岡もちょっと人が多いくらいです。しかも盛岡は山の中だから、周囲が囲まれているじゃないですか。抑うつ傾向が出るので、沿岸部の秋田に戻りたいんです。東京にパートナーが居たときに「一緒に暮らそう」と言われたときもあったんですけど、でも断念しましたね。行けないって言って。

自分は秋田がいいし、生きづらい地元を変えたい。

地元の友人知人、会員もいますし、秋田の人たちが県外流出してしまうのを見送るのは悔しいし、悲しい。ESTOに来てくれるのはいいけれども、情報を得て多くの人たちが出て行きました。それを見ているからこそ、なおさら、地元を変えないと、この少子高齢化のひどい秋田県がますます先細りになっていくっていう不安が強いので、秋田を変えることが第一目的ですね。だから秋田LGBT成人式(2017年8月12日)のときもそうだったんですけど、「戻って来られるふるさとにしよう」というのが今の秋田のスローガンですね。

一度秋田を出るにしても、専門職に就いて首都圏に就職をして、いずれは秋田に戻って行って県外就職した若い会員もいます。都市部で自分を磨いて秋田に戻るという目標を持って。本当に戻って来てくれるかは分からないですけどね。でも、戻りたいときには戻って来られる秋田にしたい、と思っています。